

露頭の風景 写真家の視点

斉藤 麻子

インターネットや日曜の地学シリーズ（築地書館）を参考に露頭を探していたところ、地獄のぞき、百尺観音や日本寺大仏の磨崖仏が面白い題材になるのではないかと思います。千葉県のこぎりやまの鋸山が目に留まりました。実際に現地に行ってみると、不自然な鋸山の山稜と初めて目にする石切り場跡、明瞭に観察できる向斜構造など、想像以上の光景に次々と遭遇し、フィルムの残り本数が気になるほど収穫の多い1日となりました。そのなかで海岸にある不動岩を撮影しようとした際、近くに今回の露頭を見つけました。青い空と海を背景に、白灰色の模様を有した露頭は美しく映えて、何か大きな船の舳先かクジラの前頭部に人が乗っているよ

うにも見受けられました。また、偶然にも釣り人がスケールの役割を果たしてくれたのは幸運でした。季節、天候、日時によってこの露頭はどのように変化した姿を見せるのか、その時々空や海が岩肌にどのように反映されるのか、何度でも訪れて撮影したいと思える露頭です。しかし、この日1日で撮影しきれなかった場所を含めて是非とも再訪したいと思うのですが、海岸線を走る国道127号線の歩道は非常に狭く、特にトンネルでは身の縮む思いで歩いたことを思い出すと、躊躇してしまうのが残念なところ

地質屋の視点

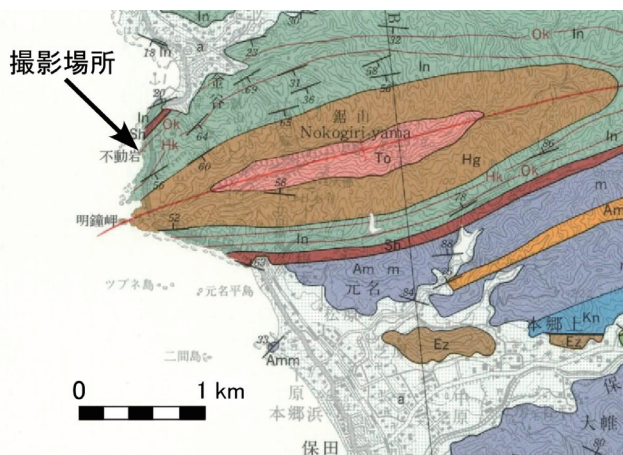
及川 輝樹

表紙写真の露頭は、房総半島の千葉県ふつつ かなや富津市金谷の鋸山の北西海岸沿いに露出する約600～400万年前の後期中新世から鮮新世の三浦層群（安房層群ともいう）稲子沢層の地層です。房総半島と三浦半島は兄弟のような半島で一連の同じ地層が分布するため、地層には“房総”なのに“三浦”の名前がついています。それでは、なぜ一連の地層だとわかったのでしょうか？三浦半島や房総半島を構成する地層には多数の火山灰などの火山噴出物（火砕岩）が挟まれています。それらの特徴を丹念に明らかにし、丁寧に分布を追っていった結果、両方の半島の地層に同じ火山噴出物が挟まれていることがわかりました。同じ連続した地

層が別々の半島で顔を出していることがわかったのです。表紙写真の露頭周辺にも凝灰岩質の砂岩・泥岩に多くの火山噴出物が挟まれていることが知られています。しかし、房総半島や三浦半島の周辺には現在火山がありません。一番近い伊豆大島火山からも50kmも離れています。三浦層群に含まれている火山噴出物は粗く、すぐ近くで火山噴火が起きていたと考えられますので、今、近くに火山がないことは不思議です。実は、三浦層群に火山噴出物をもたらした火山は、本州孤の下に沈み込んだか一部衝突・付加し、当時と異なる位置に移動してしまったと考えられています。これは、伊豆-小笠原孤の本州孤への衝突によるもので、伊豆半島の衝突や関東地方の地形の成り立ちなどに深く関係がある出来事です。

文献

- 鈴木尉元・小玉喜三郎・三梨 昂（1990）那古地域の地質。地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），地質調査所，48p.
- 高橋雅紀（1998）房総半島に分布する海成中新統に挟在するスコリアの起源とテクトニックな意義。地質調査所月報，49，157-177.
- 卜部厚志（1992）三浦・房総半島の三浦層群における火砕鍵層対比—重鉱物組成と化学組成による再検討—。地質学雑誌，98，415-434.



5万分の1地質図「那古」（鈴木ほか，1990）の一部に加筆。Inが三浦層群稲子沢層で、Hgは上位の萩生層。Toは上総層群竹岡層。In中に線で示されたOk、Hkはそれぞれ火砕岩鍵層。